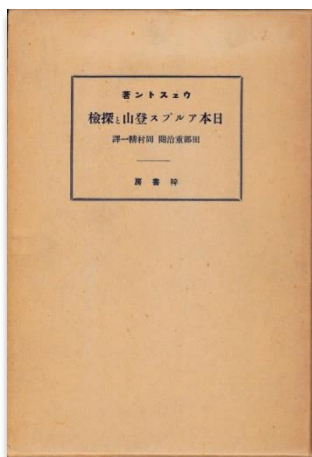


鹿沼の自然・栃木の旅

月報第28号

(2014年10月)



ウェストン著『日本アルプス登山と探検』
詳細は4頁から

北光クラブ

自然観察クラブ 鹿沼

晩秋の八溝山系小さな旅
～萬蔵山ハイキングと那須神社参詣～

晩秋の山旅ほど、此頃の私の心にしんみり訴えるものはない、それは、その性格に於て人間に特別に訴えるものをもっているのであろうか、それとも私の性格に於て、また、私の年齢に於て、そうしたものをうけ入れるような用意が出来ているためなのであろうか。それはともあれ、マーテルリンクが「沈黙」の中に言っているように、この黙々として落葉を踏んで歩き、外部的には何の目略しい経験をしているとも思われない山旅に於てこそ、私の魂が最も活々と躍動するのを感じる。

此頃、しばらく私の一人旅がつづく。以前には都会に近き浅い山の旅を除いて、一人旅をやった試しは余りなかった。しかし此頃、一人旅の頻々としてつづく故は、以前に旅のいい道連れであったものが亡くなって仕舞ったり、或は健在であるにしても、もう長途の旅が出来ない年齢に達していたりする為による。一方、若い者は余りにも私と趣味が相違して、私のように山にも溪谷にも、峠にも、山村にも趣致を見出すことの出来ないため、道連れになって呉れないことも私の一人旅の原因になっている。



田部重治著『旅路』（昭和18年7月25日・青木書店発行）より

那須黒羽（大田原市）を訪ね、八溝山系の萬蔵山（534m）に登ってみましょう。栃木 100 名山の一座。子宝、安産祈願の観音堂があります。

下山後、那須神社に参詣しましょう。

那須神社は古くから武家の崇拜を集め、那須与一が戦勝祈願をしたと伝えられています。その後、黒羽藩主の保護を受け、3 代目藩主大関高増が寛永 18（1641）年に本殿、翌年に楼門を再建しました。共に、1957 年に県の文化財、また今年 1 月 27 日、国の重要文化財に指定されました。

本会会員で日光市在住の佐々木茂氏の紹介により、那須与一伝承館の学芸員、前川辰徳氏が那須神社を案内してくださることになりました。ぜひご参加ください。

日 時：11月9日(日) AM7:00 北小西門集合(解散はPM5:00頃)

行 程：鹿沼—宇都宮IC—(東北道)—矢板IC—大田原—黒羽—萬蔵山入口
(15分)……萬蔵山参道分岐(15分)……観音堂(15分)……萬蔵山(20分)
……八溝縦貫林道(7分)……萬蔵山参道分岐(13分)……萬蔵山入口—
那須神社(南金丸)—那須与一伝承館—温泉神社(大豆田)—矢板IC
—宇都宮IC—鹿沼

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、軍手、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒(ポット)、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、
ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、ヘッドランプ、ストック、

参考書(栃木の山150、栃木百名山ガイドブック、栃木県の歴史散歩、
とちぎの社寺散歩等)、1/25,000地形図は「黒羽田町」

参加費：おとな800円、子ども400円、

今年度初参加の方は保険料800円(3月まで)

申込み：11月7日(金)までに、北光クラブまたは阿部まで

問合せ：電話090-1884-3774(阿部)



与一くん

🌀 次回予告 🌀

12月21日(日) 真岡鐵道沿線、小さな旅

～七井駅より芳賀富士を越えて安楽寺参詣、茂木駅よりSL乗車～

🌀 本号の内容 🌀

山行案内	晩秋の八溝山系小さな旅～萬蔵山ハイキングと那須神社参詣～	2
次回予告	真岡鐵道沿線、小さな旅	3
表紙の本	ウェストン著・田部重治訳・岡村精一訳『日本アルプス登山と探検』	4
活動報告	那須・茶臼岳ハイキング	14
山書談話室		17
愛書家のひとりごと	文庫本蒐集の愉しみ	3
	解説・日本近代登山の礎となった山の古典(水野 勉)	18

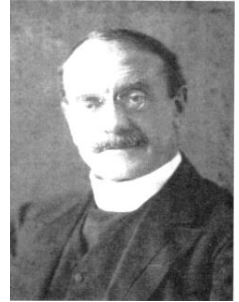
ウェストン著・田部重治訳・岡村精一訳

『日本アルプス登山と探検』

Mountaineering and Explorations of Japanese Alps.

(昭和8年12月25日・梓書房発行)

日本近代登山の父と言われ、「日本アルプス」の呼称の名付け親ともされるイギリスの宣教師ウォルター・ウェストンが、1894（明治27）年に行った北アルプス縦走の記録の一部、御嶽山登山の一節をご紹介します。彼にとって御嶽山は3年前以来2度目の山になります。同行者はカナダの宣教師ハミルトン（料理長兼写真師も務める）と考古学者浦口文治（民俗学の知識も豊富）。この旅は第11章で東京を出発して、第12章にかけて白馬岳、笠ヶ岳、常念岳と精力的に歩き、御嶽山に至ったところです。



ウェストンの登山姿

第十三章

初めから私達の意見が一致していたところだが、私達の旅行の頂点は聖山^{おんたけ}御嶽へ登ることだった。（中略）2日間雨の中を旅した後、8月11日土曜日の夕方、この探検の出発点である福島^{たわらや}の俵屋に、私達は気持ちよく休んでいた。私の靴がこの2、3日間にひどくいたんだので、私は福島へ着いた時、3年前上手に直してくれた靴行商人の家へ直ぐ出かけた。彼は普通、この土地^{あげまつ}か上松で暮すのだったが、この時は福島にも上松にもいないで、顧客先^{とくい}を巡回していた。そこで私は仕方なく、村の剣術道具直しを訪ねた。彼は私が色々教えたり、色々注意したりした通りに、必要のある処を直してくれた。

宣教師という立場もあってか、日本の「信仰登山」という宗教のあり方や民俗に興味津々で臨んだ今回の山行、御嶽山はまさにクライマックス（頂点）で、入念に準備しながら、ヨーロッパの登山クラブや団体旅行とも比較しつつ、信者たちの様子や宗教儀礼を克明に観察し記録しています。

日曜日の夜には、多くの巡礼者がやって来て、——丁度その頃巡礼者の群^{むれ}が行ったり来たりしていた——随分騒がしかった。と云うのは、日本の巡礼は、概して屢々信仰的な遊山のような性質を帯びているからである。こう云う東洋のアルプス・クラブは、私達がヨーロッパで接し馴れているクラブとは、その構成上違っている。唯入会料と会費を払う点が似ている。入会金は普通5銭(云わば1ペニーとその4分の1)で、会費は1ヶ月1銭から3銭である。登山季節が始る少し前に、クラブ員は集って、誰がこの聖山への巡礼に代表で行くかを籤^{くじ}で定める。このようにして選ばれた代表者の費用は、共有の資金から出される。(中略)他の会員も一行に加わることは許されるが、費用は自弁である。道筋や興味のある事物をよく知っている人が、先達^{せんだち}に選ばれる。この先達と云うのは、一種の案内人であり、マネージャーである。そしてこの点で、クック観光団の「指導者」^{コンダクター}に似ている。前に述べたように、旅の途中で鼯^{ひいき}肩にしてやった宿屋で、そのクラブの紋章や名前等を染め出した奉納手拭^{ほうのうてぬぐい}(日本のタオル)を、その宿の主人に与え、後から来る他の会員に対し、鼯^{ひいき}肩にしてもいいと云う印^{しるし}にする。こうした巡礼登山者達は、普通、着ている白衣とか、とてつもない広い帽子で見分けが付く。又これに加えて、手に持って行く細工のない樅材の六角形のアルペンストックでも解る。山の主な社で、この杖や着物に、支那文字やサンスクリット文字の判を押して貰い、その人がそんなに遠く迄来たことを示す。これを見ると、アルプス国スイスの或る階級の登山者間で今流行している、習慣の一つを想い起させる。それは、「此处で杖に刻印する」と云う、あのよく知られた題銘を、活かしておく習慣である。

チェンバレン教授*が言ったように、「巡礼は、日本に仏教が伝来した最も早い時代から、日本の仏教徒の間で、一つの認められた制度だった。(中略)

日本で巡礼登山者の好んで登る山々は、富士山と御嶽等である。

尤も大和の大峰山はそれより低いが、随分沢山登る人がある。

* 1893年5月の人類学研究所雑誌、359頁。



「クック観光団」というのは、当時ヨーロッパで盛んになっていた、世界最初の近代的旅行代理店トーマス・クック社の団体旅行のこと。「講」という信仰登山の団体ではあるが遊山の色彩を帯び、「先達」は言わばツアーコンダクターですね。

また当時来日した外国人にとって、登山の対象として、御嶽山は富士山に次いで人気の高い山だったようです。

彼らはまた、冷静な科学の目で火山としての御嶽山を見ていました。

(中略)この有名な峰は、昔は火山だった。もしも処々の岩の割目即ち硫黄坑から、硫黄の炎が燃え出てることや、未だ火山的生命の満ち満ちてるのを示す、他の休火山的活動の証跡がなかったなら、この山は「死火山」と呼ばれてもいいものである。この山は有史後は噴火の記録はないが、厳密に言えば「死火山」ではなくて、休火山に過ぎないのである。地理的に言えば、この山は、深い大きな窪地で、日本アルプスの中央山系から切り離されている。比喩的に言えば、この山は、特に7月と8月の間に目指して登る様々の巡礼団が行う、驚くべき催眠術的な風習で、尚一層、日本アルプス連山と区別されているのである。

そしていよいよ御嶽山登山の始まり始まり。

東から(即ち東京や上中仙道から)御嶽へ行く巡礼の主な主発地点である福島は、この峰の頂から^{マイル}23哩離れた画の様な地点である。石の重しを付け、並外れて広く差しかかった屋根のある茶色の小屋を見ると、アルプスの牧人小屋をまざまざと想い起させる。この村から、涼しい峡谷や影深い森林を越えて、7哩程歩いて行くと、黒沢へ来る。此処には、^{ようはいでん}遥拝殿があって、この聖山の麓であることを示している。此処で巡礼はアルペンストックを買い、彼等の白衣にも、その杖にも、自分達の登山を証明する為に、神官に判を押して貰う。この社の管理をしている神主は、大変親切で愛想良いのが解った。彼は、私の着物や私のアルプス杖(ヒル(Hill)製の簡略したピッケルの一つである)に判を押し、わざわざ登山する面倒をしないで、登山の証明をしてあげようと言った！ 着物の上に普通押す文字は、御嶽山、御嶽登山、御法信力と云うのである。

私達の行く径は、遥拝殿からこの偉大な山の東の支嶺をあちこちと曲りくねっていた。くすんだ赤色の溶岩の流れの為に傷痕が付いたり、雪の白い斜面で縞目の付いたりしている、そのなだらかな山頂は、その肩や低部の山腹を掩っている林の上に、遙か高く聳えていた。涼しい木蔭を出て、一点の雲もない空の下の目も眩むような日光の中を行くことが、たびたび繰返されるので、殆んど息もつけなくなった。もっと高い草の生えた山稜を登ると、松尾の休憩所に着いた。これは山径の次から次へと続く段階を示す小屋の中の、最初のものである。これはスイスのクラブ小屋に相当するもので、数が10あると想像されている——つまり一番初めのが麓に在り、10番目のが頂上に在る。この全山

(次ページへ続く)

は、1升(3パイントより少し多い)の枡に入るに十分な米の量が、地上に円錐形にこぼされた形に較べられている。この1升が10の部分に分けられ、その各々は一合(1ジル量より稍多い)と呼ばれ、そしてその段階にある小屋は、それぞれ一合目、二合目等と呼ばれている。これは丁度運動用語で、「ファースト・ラップ」(「第1回」)、「セカンド・ラップ」(「第2回」)等と呼ばれているのと同じようである。私達が松尾小屋で朝食を取っている間に、儀式的な白衣を着、先達に引き連れられて頂上から下りて来た、巡礼の一行が、その場所へ着いた。この一行の一人一人が、埃にまみれた着物を脱ぎ捨て、小屋から出て、小さな滝が一つの高い石の記念碑の後で音楽的な飛沫をあげて岩の滝壺へ落ちて居る処へ行った時、私達はすっかり好奇心に駆られた。間もなく、滝の響きよりも高い声で祈りの声が上がって来た。これ等の旅行者達は、代る代る冷たい滝の下に立って、歯をがたがたいわせ手足を震わせながら、過去の罪を悔い改める祈りと、未来に罪を犯さないようにとの祈りを幾度も幾度も繰り返した。こうした魂の純潔を求めることが、外面の象徴として、白衣となるのである。そして御嶽へ登ればそれが助成されると信じられているのである。…

白衣で滝に打たれ、贖罪の祈りを捧げる姿には、洋の東西を問わず宗教者として強い共感を覚えたようです。

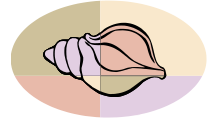
…先達は一行の指導者として、余分の徽章を付けているので、区別が出来る。彼は仏教徒の絹の総で飾った、聖帯の一種である袈裟を、彼の肩からかけている。彼は聖い御幣を、袖の上に、或は時として首の後の上衣の襟の処に差し込んでいる、——この御幣と云うのは、神道の社等でいつも見かけるもので、刻んだ白紙を上から下げた棒である。彼の手には、ゆるい金属の輪で飾った杖、即ち錫杖しやくじょうを持っている。これは1つで、登山杖の役目も、号笛も、元帥杖も兼ねるように作られてある。この特別な先達が持っていた錫杖は、特に驚くべき品物だった。彼は如何にも確心ありげに、これは「雲切り」と云うのだと知らしてくれた。そしてそれは、神秘的な呪文の力で、御嶽の神の御利益に依り、手に入れたのだと言った。どんなに濃い霧が道を見えない位掩っている時でも、これは適当な



ハミルトンが撮影した「巡礼隊」

(次ページへ続く)

道を指し示さぬことはなかった。時として、団隊の中の1人が大きな法螺貝を持っていて、道を辿って行く時や或は山の森を通過して行く時、それを時々吹く。これが初め何の為に使われたかと言うに、多分、高い峰々の淋しい叢を荒らした野獣を追い払う為だったろうと思われる。

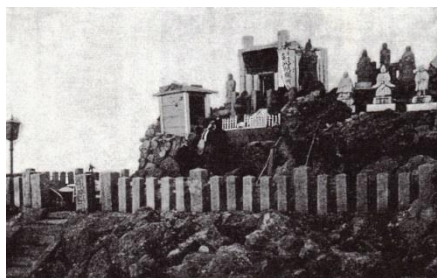


(中略)

巡礼の一行に別れの挨拶をした後、私達は上の草の生えた山稜の頂へ急いで登った。それを乗り越え、殆んど北の正面に、見馴れて懐かしいあの双峰の乗鞍の壮大な姿が見えた。私達の今立っている木のない坂は、「千本松原」と云う名の画のような小屋で飾られている。(中略)6,000^{フィート}呎の高さにある森林地帯へ入って来ると、栗の木、樺の木、すいりゅうひば(Chamoecyparis obtus)及び数種の樅の木が生えているのに気付いた。2,000呎更に登ってこの森をすっかり通り抜け、小松や赤楊やななかままで蔽われた峻しい支嶺にやって来た。この地点に在る小屋は女人堂と呼ばれている。そしてこれは前述の富士や他の山にある女人堂に相当し、過ぎし日に女性が自由に行けた限界を示している。然しながら、今や登山の事については、両性の間に殆ど区別がない様に見える。唯男の人達は登山のいでたちの一部として、白い靴下を穿くのが普通であるが、女は薄紫の絹の脛当を付けるのが最も普通である。

女人堂からは、噴火口の^{へり}縁の東の山壁が、今や真上に聳え立っていた。そして私達の道筋は段々峻しくなって、溶岩のごろごろした山稜や、雪の縞目や、砕けた岩の上に通じていた。^{はいまつ}偃松の低く拵った枝の中の隠れ家から、驚いた野兎が、飛び出して、驚きの余り殆ど私の足の間を通り過ぎた。私が曾つて見た中で一番珍妙な巡礼の実例に遭ったのは、この処であった。^{エッセルシオー}真実の「向上者」とは彼のことであった。彼の着物は曾ては白衣であったが、今は風雨にさらされて汚い灰色になっていた。これに関連して私は次のようなことを言いたいと思う。即ち神聖である一番大きな証は、この聖山へ登山した人の回数を示す一番汚い着物であると。彼は石炭のように黒い乱れ髪の上に、白い手拭を巻き、背には、^{あかし}頂上の神靈に捧げる色々の捧げ物を持っていた。特に槍の穂先で飾られた木の板と、一本の松の枝と、毛の厚い束を持っていた。この毛の束は、自分が代理をしている或る婦人の奉納品として託されたと、彼は言った。彼の奇妙ないでたちを十分にするために、彼はその手に「御嶽神社」の為の「奇妙な意匠をこらした旗」をもっていた。

午後遅くに、私たちの一行は山頂(10,000呎)に着き、小さい神社や、それに付属している仏像や、守護神や、神に祀られた昔の偉人等の行列をよく見ていると、あの老人が荷物を持って到着した。彼は、非常に人を感動させるような熱心さとこの上もなく不思議な手振りで、祈りを捧げて、あの捧げ物をあげた。頂上の下の



ハミルトンが撮影した「御嶽山頂の祠」

処々には、岩が巡礼者の草鞋で文字通り掩われていた。と云うのは、或る定った休憩所で草鞋を取り代えないのは、敬神の念を欠くと迄は考えられなくとも、少くとも、礼儀にもとると考えられていたからである。其処此处で私は、T字型の^{げた}下駄が地上に脱ぎ捨ててあるのを見た。この種のもは、一番厳格な宗派の行者^{ぎょうじや}だけが穿くのである。この下駄の台の下に、唯一つの歯があるのは、踏み敷かれる危険に在る甲虫や蛇等に、道をよけさせる一層多くの機会を与えることになるのである。何故なら、昔の巡礼登山者達は、動物の生命を取ることを避けたがる点で、厳密に仏教徒的だったからである*。その上一本歯の下駄であちらからこちらへと進んで行くのは、明に一層おずかしいが、それは一層価値あるものと思われたのである。このなかに含まれた考は、昔のヨーロッパの巡礼に於て、旅行客の靴に豆を入れるように勧めたのと、恐らく同じものだろうと思う。

*この會では一般的に行われた仏教の主義は、今は段々無くなって行き、獣肉は日本全国到る処に段々多く消費されている。神戸牛肉は、東洋の開港場の至る処で優秀なものとして有名である。併し、技師である私の日本人の一友人が、この古い主義に対する信仰は、あちこちで未だ強いものと告げてくれた。(中略)

境内から通じている段々を飛ぶように降りて行くと、小屋の中へやって来た、——これは山の上の最も高いものである——そしてその夜を、聖い山頂の守りをしている神主の枡山という人と一緒に過した。彼は面白い人で、中世紀の僧兵を思い起させるような精神を持っていた。丁度その時朝鮮で行われていた戦のことを話して、彼は次第に雄弁になり、自分がどんなに剣術や弓術を好んでいるかを話した。(中略)...

こんな聖なる山の上にも、日清戦争という下界の現実が陰を落としています。



翌朝早く私達は、最高の社が建ててある小さな岩の台地にやって来た。灰色の霧を通して、北には日本アルプスの遠い連峰の長い線が、あたかも白い雲の海から出ている岩島のように、文字通り浮び上がっているように見える。私達のすぐ下には、最高の山稜に添って1列に並ぶ6つの大噴火口の最高のもがあった。この口を満している湖水の水は、病をなおしたり悪くしたりする奇蹟的な力を持っていると思われる。



山頂・三の池畔での
「お水取り」の神事の風景

前日私達は肩に大きな紙の束を持って山を降る巡礼者達に会った。この人達は、その紙束を湖水にひたし、それを遠く離れた家へ持って行くのだと私達に告げた。彼等はこれを病気をしている友人に与え、病人はそれを丸薬にするのである。これを飲むと驚く程色々な病気がなおると言われている。併しこの湖水の水には相当な尊敬を払わねばならない。と云うのは、或る時、道中でよごれていた不敬な登山家が、この湖の中へ這入ることを敢てした時に、彼はこの神聖を汚したことに対して罰を受け、急に恐ろしい死に方をしたと、聞くも恐しく話されたからである。

私たちが海拔 10,000 呎の地点に立っていると、下の小屋から巡礼の一行がやって来て、日の出が直ぐだと話してくれた。白衣を着た一行は、うやうやしく社に近付き、熱心な祈りをあげて、捧げ物をした。それから彼等は社自身の向っている東の方に向いた。そして黄金の光の最初の線がかすかに上り始めた時、太陽の女神に祈りを捧げ始めた。先ず第一に彼等は自分達の願いに神様が耳を傾けてくれるようにと拍手打ち、それから清めの祈りの^{はらい}被をやった。被は別の祈りの繰返しと混っていた。この別の祈りは、巡礼団の一つが登山して来る時にも絶えず耳に聞えるもので、「六根清浄・御山快晴」即ち「六つの感覚が清浄ならんことを、お山の天気が快晴ならんことを」と云うのである*。

*この祈りは、元は仏教のもので、此处に述べた六根と云うのは、目、耳、鼻、舌、心、体である。これを繰返す巡礼者は、これが大部分漢字なので、殆んどその意味を知らないのである。然しながら、淋しい山の側面で、先達の振る鈴の響だけで破られるこの聖歌を聞いたことのある旅行者は、その物凄い感響をた易くは忘れないだろうと思う。

日の出に対する「無気味な礼拝」に続いて「神おろし」の様子が克明に描かれています。しかしその予言には、疑問符も…。この後、御嶽を下ります。

それから印結いんむすびと云う異常な無言劇のような手振が続いて起った。これ等の気味悪さは、殆ど筆紙に尽くされない。(中略)私はこれを初めて見たわけでは決してなかったが、この全景は私には随分気味悪いものだった。併しもっと奇妙な光景が、未だ待ち構えていた。(中略)

…これは神様の憑のりつった印だった。すると、この間中、残りの人に対して音頭取りの役をしていた1人の巡礼者即ち前座まえざが、この霊媒の方に向かって恭しく平伏した。彼の額を2人の間にあった岩の上に低くさげて、この霊媒に親しく憑のりつった神の尊体の「御名前」を尋ねた。するとしわがれた小さな声で「我は普寛ふかんれいじん霊神なり」と答えた。これは、王滝側(これは黒沢道を「表口」と言うのに対して「裏道」と言われる)から、丁度1世紀昔、御嶽へ最初に登った人が神に祀られた、その死後の謚号なのである。

前座がその名を聞いた時、彼は5、6人の巡礼者達の祈願を述べ続けた。それは皆極く単純なものだった。或る人は彼等の旅行中に恐らく出会う天気について問い合わせた。或は又家にいる家族の健康、或は又翌年の間の事業の予想について問い合わせた。低い声中座は神の答えを述べた。私はこの人がその午後は曇天だと予言したことを覚えているが、これ等の答えは、神託の場合に普通であるように、都合のいいようにぼんやりしたものだった。実際、私がこの予言を想起したのには尤もな理由があった。何故なら、その時、このことがあって2、3時間の後、私達は無情な激しい雷雨を冒して、森の滑りがちな傾斜を突進していたからである。尋ねた質問を全部断言的に済して了った時、霊媒の手に在る御幣は、神霊が立ち去り、その人が再び我に還った印に、下げられた。それから前座は立ち上った。そして彼は色々世話をやいて、全身昏睡状態の間非常に硬くおぼれていた中座の体をはげしく擦り、手足を打ち始めた。間もなくその男は正気付いた。そして一行は立ち去った。彼等は、私がいることに、宛も周りの木立や石に対してと同様に、注意を払わなかった。

私達の一行は、この年は御嶽の一種の横断をやっていたわけで、帰路には前日の跡を踏まなかった。私達は変化を求めて、もっと峻しいそして或る点ではもっと興味ある道筋——即ち王滝を通過して上松へ行く道筋——を下りた。午前8時30分に山頂を離れて、でこぼこした熔岩や、ざらざらした燃えがらや、峻しい岩の上を、かなり難儀しながら下りて行くと、金剛童子こんごうどうじの小屋と言うよりも、寧ろ破壊したその残骸に着いた。空が間もなく曇って来て、熱帯的な雷雨がどしゃ降りの雨と一緒にやって来たので、田ノ原小

屋に1時間以上も雨宿りをさせられた。もっと下の中小屋で、私達は、スズメノミコの伝説を描いた、古い宗教的舞踏を表わした画を見た。御嶽が開かれている間、この舞を黒沢で、演舞者の一団がやるのである。登山の途中、^{どもえこう}巴講の一行が、自分達の為にこの舞をさせて、33ドル払ったと、小屋番が話した。彼等は、下山した後、天皇の為に、又日清戦争に勝利を得る為の祈祷式のつもりで、この舞を公開したが、それに15ドル払った。

私達は森を通ってうと、神道の2人の神官に会った。この人達と私達は、中小屋の下の鳥居の下で話をした。彼等が写真を撮ってもらう為に立った時、その汚い着物とむしゃくしゃした髪は、平野にいる仏教の僧達の綺麗に剃った頭ともっと色鮮やかでもっと立派な寛衣と、奇妙な対照をしていた。午後2時頃降り路から少し廻り道をして行くと、王滝の麓へ来た。この滝は、高い暗い杉で蔽われた人里離れた滝壺に、絶壁から落ちている美しい小滝である。私達がびかびか光る水の上の光と影のたわむれを眺めて立っていると、たった1人の巡礼者がこの溪谷へやって来た。彼はすっかり裸になって、氷のような冷たい滝の下に立った。そして胸に手を組んで、殆ど苦しい迄に洗罪と魂の純潔の為の祈りを捧げ始めた。この純潔がないなら、山頂へ登り、聖い社に頭をさげ、祈りを捧げても、無駄だと、彼は私に話した。真剣な気持ちでやってるように見えるその祈りに私が耳を傾けていた時、ダビデの言葉がはっきりと想い起された、――

「誰か神の丘に登らん。或は又誰か神の聖き宮居に立たん。

そは潔き手、潔き心を持てる人。魂を虚栄にささげず、いつわりて誓を立てしことなき人なり。」

かの偉大な使徒がその昔、「あらゆる国民のうち、神を恐れ正義をなす人こそ、神は受け入れ給わん」と書き記したのは、こんな人を言うのではないだろうか。

山の麓近くの、蔦のまつわった絶壁の下に小綺麗な新しい社が立っていて、それに^{らくがきむよう}落書無用と書いてある。王滝川の激しい流の上の丘腹に在る、美事な位置の小村の王滝で、私達はその夜を過した。その日は先に述べた普寛霊神が初めて御嶽に登ってから100年になり、その祭を記念して、すべてがお祭り気分になっていた。この善良な人



「御嶽講」のひとつ
「巴講」のマーク
ウェストンは気に入って
自著『日本アルプス』
の表紙に使った

が最初登山を試みた時、彼はすっかり道に迷って了ったと言われている。然しながら2度目には雷鳥に助けられ、それに導かれ無事に頂上に登ったのである。

この登山家を記念した祭は、8月の上旬中^{ちゅう}続いた。微風にそよぐ吹き流しの付いた高い竹の一と群が、この偉人の名と諡号を記した大きな碑の上に、見張りのように立っていた。これは高さ14呎、幅8呎の楕円形の石で、村の入口の丘に立っていた。これがあるのを見ると、バルマ(Balmar)(訳者註、シャモニの谷間の案内者で、モンブランの頂上に最初に達した。)がモンブランでやった世界的に有名な偉業を記念する、シャモニの記念碑を、思い出すのである。

(中略)

ずっと進んだ橋渡の橋のとこの、小さな休憩小屋の主人が——此处で3年前にベルチャーと私は御嶽からの帰路泊った——直ぐ私を思い出して、親切に迎えてくれた。中仙道へ出ると、私の信頼した友とも別れを告げねばならなかった。と云うのは、ハミルトン氏は仕事の都合上、止むを得ず私の旅行が済む前に、名古屋に帰らねばならなかったからである。浦口と私は、その日遅く福島に帰った。(後略)

※ 本文は昭和8年の初版本から適宜抜粋し、読みやすいように書き改めました。



←山頂周辺の登山地図

自然観察クラブ 会費納入のお願い

☆ 年会費(個人または家族) 1,800円

〃 (会報不要または直接取りに来られる方) 600円

※ 会報はインターネットでご覧になれます。

☆ 会費の主な用途
会報発行・発送用諸経費(郵送料、封筒・印刷用紙、インク代等)、
プリンター保守費用、
臨時催事の通信、その他

那須・茶臼岳ハイキング
9月21日(日) 天気・晴れ時々くもり

そろそろ紅葉が期待される秋の日曜日、那須に行って来ました。昨年の同時期にも試みたのですが、主峰茶臼岳の山頂を目指す那須岳ロープウェイを、周辺の駐車場がすでに満杯で断念したため、今年は1時間早く午前5時の集合出発で出かけて、無事7時半の臨時始発便に搭乗できました。

「山頂駅」といっても9合目で、残りは小1時間の岩場の登りです。硫黄くさい風が時々流れてくる中を、早くから賑わう登山客に交じって、まばらな植物を観察・撮影しながら登って行きます。天候にも恵まれ、遠くまで連なる山々峰々、その尾根道を歩く人々の姿、那須の森と田園（や時にゴルフ場）が混在する下界風景、その向こうの雲海に埋もれた谷、とひと息つきたび、冷たい風に当たりながら素晴らしい展望を楽しみます。

荒涼とした山頂から、縦走路の途中の鞍部にある「峰ノ茶屋跡」まで下り、時間が早かったので、下山道とは反対方向の、茶臼岳の裏側へ回ってみました。硫黄鉱山の跡とのことで、方々に新たな噴出口があり、轟音と共に水蒸気が噴き出して、その周辺に硫黄が黄色く結晶しているワイルドな風景（「無間（むげん）地獄」という）の一方、足元にはたくましい植物も多く、眺めたり写真を撮ったり、立ち止まり立ち止まりの道中です。茶臼岳の北側から見ると、標高や日照の具合でか、周囲の山では場所によって



ロープウェイ山頂駅(1684m)
降りてすぐの登山道入口



「峰ノ茶屋跡」から茶臼岳の裏側へ
「硫黄鉱山跡」「無間地獄」を経て「牛ヶ首」に向かう道の荒涼とした風景

すでに紅葉が進んでおり、鮮やかなモザイク模様が眺められます。(今年はいつもより早いとか、でもこれからまた気温が上がるとの説もあり、紅葉の今後の進捗は保証の限りでない?)

「牛ヶ首」という大岩のある場所で早めの昼食をあげ、引き返しました。那須には幾度来ている、同行者の誰もが初めてのコースで、人通りはあるが奥まった静かないい



荒々しい登山道に
可憐なリンドウの花

場所でした。先ほどの「峰ノ茶屋跡」に戻って山麓を目指す道中は、リンドウの花が飾っていました。

最初の小1時間の登りの他は平坦か下りの比較的楽な山行でしたが、たっぷり歩いた1日でした。



姥ヶ平方面を見下ろす
一部紅葉の絶景

それから1週間、中央アルプスの御嶽山が突然噴火し、我々のようにロープウェイを使って、紅葉見物を楽しみに訪れていた大勢の登山客が被災。お見舞い申し上げます。

※ 参加者

小川知峻・裕月・真司・恵美、
石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき(計8名)

※ 見た植物(50音順)

(草の花) アキノキリンソウ、エゾリンドウ、
オトギリソウ、オヤマリンドウ、シラネニンジン、
テンニンソウ、ヒヨドリバナ、ヤマハハコ、

(草の実) イワカガミ、オオバコ、ウラジロタデ、(その他の草) ノギラン、

(木の花) ホツツジ、(木の実) アカミノイヌツゲ、シラタマノキ、ノリウツギ、
ハナヒリノキ、マルバシモツケ、ミヤマハンノキ、

(その他の木) アカモノ、ウリハダカエデ、オオカメノキ、ガンコウラン、サラサドウダン、
ナナカマド、ハイマツ、ハクサンシャクナゲ、ミネカエデ、ヤシヤブシ、

(シダ) シシガシラ、ヒカゲノカズラ、(蘚苔類) イオウゴケ(次ページに写真)



本日の最高地点
茶臼岳山頂(1915m)にて

❁ 紅葉の那須山行写真集



那須岳ロープウェイ
これで9合目まで一気にける



ロープウェイ山頂駅付近から
本当の山頂方面を望む



硫黄の噴出口近くに見られた
イオウゴケ



山頂に向かって
不毛の登山道に行く



茶臼岳山頂



山頂近くの
那須岳三角点



山頂からの絶景に暫し見入る



山頂から峰ノ茶屋跡へ
展望の開けた下り道
さらに遠くの峰を目指す人の姿も



見るも恐ろしい？
「無間地獄」の風景
硫黄ガスの吹き出す音が
シューシューと聞こえる
(上下とも)



←花のいろいろ
(左上よりヤマハハコ、シラネニンジン、ウラ
ジロタデ、左下シラタマノキ(実)、ホツツジ)



恒例、田部重治研究会・白坂正治氏からのおたよりです。

『月報第27号』ありがとうございました。植物への愛溢れ、ほんわかとなる誌面です
ね。

愛読者の一人として掲載を喜ぶ“愛書家のひとりごと”文中の“『わが山旅五十年』に付いている「創刊5周年」の真赤な帯”は、私にとりまして大変貴重な注目する事実でした。

新刊の時点で購入したものの他作品と同じく帯はなく、その存在は謎だったのです。書誌でも判明させておきたいところですが、まして書影となると、帯(腰巻き)カバー函(箱)の有無は重要で、平成に入ってからの本すら(とはいっても確かに20年近くにはなっているわけですが)不明の現状。50年を軽く越してしまう著作がほとんどの究明は楽しい(!?)苦勞です。

9月27日



ところでこれに先立つ9月初め、当方で定期購読している「山書月報」で情報を得て、田部重治研究会刊『田部重治の登山と英文学』について白坂氏に問い合わせました。

例年にならない早い秋の訪れとなりました。いかがお過ごしですか。

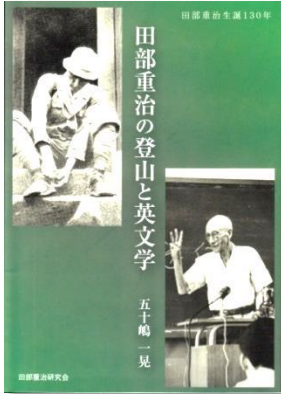
いつぞやは竜巻のお見舞、またこの度は台風のお見舞ありがとうございます。実は2月の大雪、鹿沼でも山の方では記録的(古峰ヶ原で1メートル)で特にスギヤイチゴの被害が多かったようです。昨年は記録的な大雨もあり、私の店の100メートル先では歩道が冠水し、床下浸水もあったようです。他人事ではありません。

さて、田部重治研究会の会報「鶴のやうに」についてですが、14号以降は発行になりましたでしょうか。また山書月報8月号の「7月の新刊」によると『田部重治の登山と英文学』が田部重治研究会より発行されていますね。いずれも注文先は白坂様でよろしいですか。可能でしたら1部ずつお送りいただきたく、お願い申し上げます。価格(あるいは会費)と代金の振込先をお知らせください。

今後もお便りをお待ちしております。(以下略)

(阿部良司)

折り返し『田部重治の登山と英文学』が送られて来ました。(次ページ書影参照)



阿部様

二度と戻らず、かえりもしない時の流れに自然と人との共生をねがい、そしておのが生きざまを問うている自分があります。

この度は御手紙をありがとうございました。

御照会の『田部重治の登山と英文学』を御送本申し上げます。生誕130年に初となる田部重治先生の研究書を出せたことを人との出会いの妙にうたれつつ喜んでいる次第です。是非読後感をお聞かせ下さい。

(以下略)

9月16日

白坂正治

う～ん、いつになりますかね、「読後感」。子どもの頃から、「読書感想文」って苦手だったんですよね…。次のコーナーへ行きましょう。前号の続きです。

愛書家のひとりごと

文庫本蒐集の愉しみ・3

「どうして水野さんの署名が？」と店主(和久井さん)に訊ねると、「うん、巻末の解説を書いているんだよ」という。題は「日本近代登山の礎となった山の古典」である。

以下その全文。

日本近代登山の礎となった山の古典

水野 勉

日本人による近代登山がはじまったのは明治30年代に入ってからだが、そのとき登山者に大きな影響を与えたのは、1894年(明治27年)に発行された志賀重昂の『日本風景論』(現在、講談社学術文庫に収録)であった。この本は、日清戦争中の日本におけるナショナリズムの昂揚期に、日本の国土愛を説き、愛国心を鼓舞する内容であるが、同時に「登山の気風を興作すべし」という項目を設けて、日本人の登山熱を強く煽った。そして、登山案内記事を掲げ、更に「登山の準備」および「登山の注意」と

(次ページへ続く)

して、初歩的な登山技術の説明をしている。それは登山扇動の書であると同時に、登山入門書であった。登山技術の内容はイギリス人、フランス・ガルトンの『アート・オブ・トラベル』の紹介にすぎなかったが、当時の日本にとっては目新しいものであった。この『日本風景論』を読んで感激し、登山へと誘われた若者が数多くいたことであろう。そういう意味では、志賀重昂は日本近代登山の父といってもいい。

しかし、志賀は登山経験がまったくなかった。日本における近代登山のきっかけを作ったことは確かだが、近代登山を推進することはできなかった。

日本の近代登山を推進したのは、イギリス人、ウォルター・ウェストンである。そして、その著書『日本アルプス——登山と探検』は、外国人の著書ながら、日本の登山界に大きな影響をおよぼしたのである。日本の近代登山を育て上げる役割を果たした本として、日本登山史上、最も重要な位置を占めている文献である。ウェストンは志賀と違って、実践的な登山者であった。ヨーロッパ・アルプスにおいて登山の経験を積み、日本の山々を登った登山者であった。外国人としてはじめて日本の高山を登ったわけではない。1870年代後半から1880年代にはすでにアーネスト・サトウが北岳、ウィリアム・ガウランドとエドワード・ディロンが槍ヶ岳を登っているし、ベンジャミン・スミス・ライマン、ジョン・ミルン、ロバート・ウィリアム・アトキンソン、ウィリアム・グレー・ディクソン、J・J・ライン、エルヴィン・クニッピング、エルヴィン・ベルツ、ジョルジュ・アペールなどが、北海道、東北、関東甲信越の山々を登っている。ウェストンが日本の山の最初の外国人開拓者ということとはできない。

しかし、ウェストンは彼の先行者たちと違って登山家であった。先行者たちは科学者や旅行者として日本の山々を登ったが、ウェストンはヨーロッパ・アルプスでの登山を経験したアルピニストとして日本の山々を登ったのである。その意味で彼は外国人ばかりでなく日本人をも含めて、日本の山の先駆的な登山者なのである。先駆者であったばかりでなく、彼は日本の主な高山を数多く登っている。そして、その成果を英国山岳会機関誌『アルパイン・ジャーナル』および英国地理学協会機関誌『ジオグラフィカル・ジャーナル』に発表し、単行本として『日本アルプス——登山と探検』と『極東の遊歩場』をまとめあげたのである。特に、『日本アルプス——登山と探検』は、1896年(明治29年)に発行され、それを読んだ小島烏水と岡野金次郎がウェストンを訪ね、ウェストンのすすめで日本山岳会の創立となり、日本において登山の機運が一気に盛り上がったので

ある。ウェストンなくて、この時期に日本山岳会の創立はなかったであろうし、日本の登山が明治時代末期にかように盛んにはならなかったであろう。まさしく、ウェストンは日本近代登山の父なのである。

ウェストンは1861年にイギリスのダービーに生まれ、ケンブリッジのクレア・カレッジで学び、1886年にはオックスフォード教区で司祭となる。1888年(明治21年)に英国国教会伝道協会の宣教師として来日した。1895年(明治28年)には帰国し、1902年(明治35年)に英国福音伝播協会の宣教師として再来日する。1905年(明治38年)には日本を離れ、帰国する。1911年(明治44年)には横浜のクライスト・チャーチのチャプレンとして3度目の来日をし、1915年(大正4年)まで日本に滞在する。

本格的に日本の山を登りはじめたのは1891年(明治24年)である。その日本における登山歴の概略は次のとおりである。



1891年(明治24年) 浅間山、槍ヶ岳(試登)、御岳、木曾駒ヶ岳

1892年(明治25年) 富士山、乗鞍岳、槍ヶ岳、赤石岳

1893年(明治26年) 恵那山、富士山、大町から針ノ木峠越え、立山、前穂高岳

1894年(明治27年) 白馬岳、笠ヶ岳、常念岳、御岳

1902年(明治35年) 北岳

1903年(明治36年) 甲斐駒ヶ岳、浅間山

1904年(明治37年) 地蔵岳、北岳、仙丈岳、高妻山、妙高山、ハヶ岳、富士山

1912年(明治45年) 有明山、燕岳、槍ヶ岳、奥穂高岳

1913年(大正2年) 槍ヶ岳、奥穂高岳、焼岳、霞沢岳、白馬岳

1914年(大正3年) 立山温泉から針ノ木峠越え、燕岳、大天井岳、富士山

第1回の滞日中、1891-94年にウェストンはめばしい山々を登っているが、そのことを日本人登山者は知らなかった。というよりも、その頃日本には登山そのものを楽しむという風潮が殆どなかったのである。したがって、ウェストンが1896年にロンドンのジョン・マレー社から“Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps”を発行したときも、日本ではその本の存在が知られていなかった。ウェストンもこの本をヨーロッパの人々に向かって日本での登山を知らせるために書いたのである。そして、いさか誇らしげに“Exploration”

(次ページへ続く)

あるいは“Japanese Alps”と題したのである。

日本の登山愛好者の一人、岡野金次郎がこの本の存在を知ったのは、1902年（明治35年）であったが、それはほんの偶然であった。岡野の勤務先スタンダード石油会社の横浜の事務所で支配人ジェームズ・ハッパーがボーイに一冊の本を包装するように渡し、そのボーイがこれから包装しようとしたときに、ちょうど岡野がそこを通りかかったので、ちょっと待ってもらって見せてもらったら、驚いたことには、槍ヶ岳や乗鞍岳の写真が出ていた。それがウェストンの『日本アルプス——登山と探検』であった。そして、その著者が同じ横浜に住むイギリス人の宣教師であることがわかり、ウェストンとの交友がはじまり、やがて、1905年（明治38年）の日本山岳会の創立へと発展したのである。

この『日本アルプス——登山と探検』の内容は16章からなり、前述したように、1891年から1894年までの日本での登山について記されている。ここでもう一度強調しておくべきは、これらの登山が日本では近代登山として先蹤的であったという事実である。明治24年から27年という、日本の近代登山の黎明期の登山だったのである。『アルパイン・ジャーナル』第19巻（1898年8月）において、そのいささか誇らしげな記述が批判されていようと、国際的に日本アルプスを紹介し、更に、結果として日本人に対しても日本アルプスを紹介した功績は大である。

当時の日本人にとっては、この一書によって、日本アルプスの広大で、美しい未知の山域の魅力を再発見させられたのである。そして、単に、登山記というばかりでなく、山村の生活やそこに住む素朴な人々とのふれあいを記述している。ウェストンは日本の山々を愛したが、同時に日本の民俗にも心ひかれていた。それはこの『日本アルプス——登山と探検』の中でも各所に現れている。一口にいえば、彼は日本が心から好きだったのである。現在の読者は、かつて小島烏水らが感激したような興奮を覚えないかもしれないが、この本を読むことによって、100年以前の古い登山のことを知るばかりでなく、古い日本の風物や生活にふれることができるのである。更に、著者であるウェストンのあたたかい心情にも感動を受けよう。

日本が好きだったウェストンは3度日本を訪れ、1度目の登山記を『日本アルプス——登山と探検』として発表した。2度目と3度目の滞日中の登山記を“The Playground of the Far East”として1918年（大正7年）に発表した。前書が日本の近代登山の黎明期に強い刺激を与えたため、非常に有名になったのに比べると、後書は発行時にはそ

れほど注目を引かなかったようである。じっさい、日本では殆ど反応がなかった。日本山岳会の機関誌『山岳』には1行の紹介も批評も掲載されなかった。ウェストンの助力で日本山岳会が創立され、ウェストンはその最初の名誉会員にも推挙されていたし、1度目の滞日中と違って、日本の登山界とは交渉を持っていたのに、この第2著には反応がなかった。未だによくわからない。

それはともかく第2著は「続・日本アルプス——登山と探検」というべき内容である。日本の近代登山が花開いた時期での山行であり、日本の生活にもかなり慣れてきた時の記録であるので、ウェストンは日本に対してより親しみを感じて筆をすすめている。ウェストンの著書として、前書と並んで代表作といえよう。戦後になって、ようやく翻訳され、1970年に岡村精一訳で『極東の遊歩場』(山と溪谷社)として発行された。

日本におけるウェストンに対する関心は10年前頃から非常に高まり、ウェストン研究はおどろくほどの熱心さで進んでいる。詳しい年譜も日本山岳会機関誌『山岳』第82-85年(1987-90年)に発表され、ウェストンの登山日記も翻訳されて、今年、1995年2月に発行されている(『日本アルプス登攀日記』三井嘉雄訳、平凡社東洋文庫)。

ウェストンのすすめで日本山岳会発起人の一人となった小島烏水は、この本に感激して、1903年(明治36年)に最初に翻訳しようとした。それは『日本中央大山系横断記』と題された原稿のまま現存しているが、小島が自分用に縮訳したもので、発表を目的としたものではなかった。本格的な翻訳は1933年(昭和8年)に梓書房から発行された、田部重治訳、岡村精一訳『日本アルプス——登山と探検』である。この訳書では、原書にあるA、B、二つの付録論文のうち、Bの「朝鮮における悪霊払いの祈祷」が省略されているが、他は全訳である。

この岡村訳は、1953年に創元社から創元選書の1冊として再刊された。文章は改版にあたってかなり手が加えられた。更に、全面的に改訳され、1963年に角川文庫の1冊として発行された。この最後の角川文庫版を底本として今度の平凡社版となったのである。

なお、他に異訳本が2種類ある。一つは、1962年に『日本山岳名著全集』(あかね書房)の第1巻の中に、山崎安治、青木枝朗共訳で「日本アルプスの登山と探検」として収められている。もう一つは、1982年に黒岩健訳『日本アルプスの登山と探検』

(大江出版社)が発行されている。しかし、この二つの訳とも、現在では入手が困難になってしまっている。

(みずの つとむノ日本山岳会理事・日本山書の会代表幹事)

ウォルター・ウェストン著・岡村精一訳『日本アルプス 登山と探検』(平凡社ライブラリー94)解説

ウェストンの『日本アルプス』は読んでいなくとも、この解説は楽しく読める。『日本アルプス』を読んでいなくとも、ウェストンが日本の登山界に与えた影響、この本の歴史的価値がわかるからである。文庫本の価値、少なくとも平凡社ライブラリーの価値はこの解説にある、と言ってもいいと思う。平凡社ライブラリー以外の文庫本でも、原著にはない、著名人による「あとがき」や「解説」「付録」が付いていることがあり、宝の拾い物である。

平凡社ライブラリーの「山シリーズ」の筆頭にウェストンの『日本アルプス』を置いたことは日本における近代登山の始まりがウェストンにある、という事実を語る上で重要である。そして2冊目に田部重治の『わが山旅五十年』が置かれた。田部が日本において最も日本人らしい山登りを始めた人、であるとするならば言わずもがなのことであろう。

その後、『尾瀬と鬼怒沼』は山口耀久氏が解説を書いているが、『黒部溪谷』『アルピニストの手記』『アルプス記』の解説は水野さんが書いている。その後水野さんは登場していないが、こんな文章をまとめて本になっていればいいのに、と思いながらまだ見えない水野さんの本を探してみたら、あった。2014年2月15日発行の『登山家の肖像—思想と方法—』である。穂高書房から連絡があって送ってもらった本である。水野さんが製本以外は自分で作られた本であるらしく、限定15部。お金がなくて何か月も経ってから代金を送った本であった。

(阿部良司)



木曾御嶽山に思うこと

気木曾のナー 中乗りさん 木曾の御嶽さんは ナンジャラホーイ

夏でも寒い 裕やりたや足袋添えて ヨイヨイヨイ ハー ヨイヨイヨイノ ヨイヨイヨイ

去る9月27日(土)に起きた御嶽山の突然の噴火(水蒸気爆発)で、紅葉シーズンの週末の昼時の賑わいの中にあった山頂が一転、50名を超える犠牲者を出す痛ましい事件の現場となったことは、まだ記憶に新しいところです。標高3,000m超の高所でもあり、台風の襲来とそれに続いて訪れた「厳寒期」のため、短期間に限られることになった捜索作業には、厳しい環境に多くの人手が投入されました。その間、現場へ人員を輸送するヘリコプターの麓の基地が、TVの報道番組に度々映し出されましたが、背後に聳えるその山容に、初めてこの山の美しさを認識しました。九死に一生を得た登山者の、山を逃げ降りながら撮影した映像(数時間後にはネット上に公開され大勢の人が閲覧しました)にも、空の青さ、紅葉の鮮やかさが鮮明に映し出され、その一瞬後には地獄絵図が展開したのかと、豹変する自然の厳しさに思わず息を呑みます。しかし、常に我々を優しく包み込んでいるように思えるすべての自然が、あの津波のように、また今度の火山のように、一転怒りの牙をむくことになるかも知れない。人間はもっと謙虚にならなければならないのだと思います。

今回運悪く大勢の登山客を巻き込んでしまった御嶽山ですが、有史以来噴火の記録がなく、35年前の水蒸気爆発までは「死火山」と思われていたそうです。しかしそれに遡ることさらに約80年、日本に近代登山をもたらしたウォルター・ウェストンの記述の中に、死火山ではなく「休火山」であると書かれているのを見つけたのが、今回の特集のきっかけとなりました。それ以前の長い年月にわたって信仰登山の山として親しまれていた山に対する、遥かヨーロッパ・アルプスで登山の経験を積み重ねてきた西洋人の認識には驚きの思いです。

「経験したことのない」自然現象があまりに増えているように感じる昨今ですが、経験にこだわることなく、想像力をたくましくして、自然の驚異を想定し、備えて行かなければならないのだとつくづく思うこの頃です。
(編集人)

鹿沼の自然・栃木の旅 月報第28号

2014年10月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp



ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

